

播磨国風土記講座

本居宣長

『播磨国風土記』から



日本創成史を

復元する。

平成22年6月、加西市在住のある方の案内を得て、東播磨を2日間にわたり見てまわりました。そのとき、次第に私の胸にわきあがった思いは、「ああ、そういうことだったのか」というものでした。『古事記』、ことに本居宣長の解釈による「それ」は基本的にすばらしいものですが、かんじんなどところで間違いを含んでいます。しかも、おそらく宣長の半ばは意図的な誤謬ではないかと思っていました。宣長没後に存在が知られた『播磨国風土記』には、それを正せる可能性がいくつも含まれています。8年前に加古川の流域を歩いて、私に見えてきたものは、日本という国ができあがってゆく、紀元前1世紀の姿でした。

光田 和伸

時間 各回 **13時30分**〜**15時30分**
(受付時間13時)

場所 アステイアかさい3階多目的ホール
(加西市北条町北条28-1)

受講料 各回 **500円**

定員 **94名** 先着順(申込不要)

第1回 10月11日(木)

「万葉集」と「播磨国風土記」
『万葉集』は「古事記」「日本書紀」が葬った日本建国史の正しい糸口を伝えている。それは加古川の河口にある。

第2回 11月8日(木)

「阿菩の大神」とは誰か
ヤマトを初めて建国した「阿菩の大神」は、その晩年、出雲国神庭の地に引退した。そこは「ヤマトタケル」の聖地となった。

第3回 12月13日(木)

「牛頭天王」の真実
ヤマト創成の3代一スサノオ、オホトシ、アヂスキタカヒコネーは、のちに「天王」の名で讃えられ、中世にかけて「牛頭天王」の名が定着した。

第4回 1月10日(木)

「天孫族」とサルタヒコ(佐太大神)族
「漢委奴国王」の金印を受けたのはサルタヒコ族の王である。彼らは紀元前15世紀に殷の建国に協力し、文字と貨幣の創設に重要な役割を果たした。

第5回 2月14日(木)

カムヤマトイワレヒコ(神武天皇)と久米族
オケ、ヲケニ皇子の発見は、果たして偶然だったのだろうか。天香具山の半分は伊予国久米族の領地に落ちたという伝承(伊予国風土記逸文)は何を暗示する？



講師 **光田 和伸氏**

講師プロフィール

国文学者。愛媛県松山市生まれ。元国際日本文化研究センター准教授。専門は比較文化、比較文学。主に和歌、連歌、俳諧を研究。著書に「恋の隠し方―兼好と「徒然草」―」「芭蕉めざめる」(ともに青丘書房)。